



は比べものにならないと思うのです。

仮に、これまで前衛芸術と呼ばれたものが何かを「更新」するものであったならば、「いまの」前衛芸術は「何を」更新するのだろうか。

時代を?世界を?アートシーンを??

エンタメ、サブカルで括られるような活動はさておき、先鋭的なある幾人かのアーティストたちに、かつての「前衛」の精神性が受け継がれていることには疑いをもちません。されど、多種多様な層で覆われ、情報に満ち溢れたこの現在の世界に立ち向かうにあたり、その精神性が単に表現活動へのある種の自衛=保険として機能していないかどうかには、自分自身のことも含め、常に批判的でありたいと思っています。

櫻井拓見 Takumi Sakurai

「chon-muop」(チョンモップ)演出家、トリのマーク(通称)所属俳優。

次回公演

Webにて随時公開。
chon-muop HP <http://www.chon-muop.com>

櫻井拓見 chon-muop 演出家 前衛芸術が更新するもの

「前衛」「前衛芸術」という言葉を前にすると、どこから身構えてしまう自分がいます。

それは、「昔はよかった」的な懐古趣味やノスタルジイに話題が回収されてしまう可能性への抵抗感もありますし、「それっぽく」着飾った言葉に対する思考停止への怖れもあります。

また、固定観念を破壊するという固定観念に縛られてしまっているのではないかという矛盾も少なからず感じられるし、何より、いま現在、例えば2014年の日本において、「前衛」ないし「前衛芸術」が果たして成立するののかという強い疑いを払拭できないからです。

アップデート、バージョンアップ、更新、といったような言葉が、日常的に使われるようになりました。「●●、バージョンアップした?」とか「昨日、××更新したよ」という会話は、冷静に考えるとちょっと間が抜けているようにも感じられるのですが、ともかくも、私たちは様々なレイヤーにおいて日々を「更新」しています。

その「更新」の速度、拡がり、重なりは、後世に多大な影響を及ぼした「前衛芸術」が台頭した頃の世相と



PHOTO © 聡明堂

が一つありました。それは、唐十郎の特権的肉体論です。むかしに読んで結構忘れてしまっているのですが、たしかそこに書かれてある「俳優は役を演じるのではなく、自身を役にするのだ」とか「今ここにある“肉体”が語り出す」とか。とか俳優の生き様(まんま?)を舞台にのっけるというスタンスは「初期型」と同じだし、荒唐無稽なドタバタ劇ってのもいっしょだナァ。唐十郎といえば、実存主義。「初期型」は今まで、嗅覚をたよりにROCKでPUNKでFUNKなものを追い求めてたけど、ひとつ実存主義ってのを調べてみようかしら。きっとROCKな哲学なんじゃろな。うん。んで、それは次回の現代戯曲シリーズ、サルトルにつながるべくということなんじゃな。ハハハハうまいことできてるナァ。

カワムラアツノリ Atsunori Kawamura

学生演劇→黒テント(養成所)→ダンス方面。01年ダンスパフォーマンスグループ「初期型」結成。モットーは「愛すべきバカ」。ダンス方面からは演劇的ですね、演劇方面からはダンス?よくわかりません、とか言われるが、当人達もよくわかってない。 <http://shokigata.ops.jp>

次回公演

・SMF(サイタマミュージーズフォーラム)事業 子供対象WS「家族のものまねダンスショー」2014年9月20日(土)@北浦和商店街
・「アート日和@行田」にて上記WS
・2014年11月23日(日)@牧嶺舎(行田市) <http://www.artplatform.jp/sp/>

カンパ募集!!

現在、「artissue」は編集部のみで運営・発行しています。まだ試行錯誤の段階ですが、応援して下さる皆様からのカンパをお願い致します。集まったカンパは今後の運営資金として大切に使用させていただきます。これからも前衛(的)舞台芸術について多くの方に紹介していきたいと思っています。いくらでも構いませんのでご支援のほど宜しくお願い致します。誌面広告も募集しています。

振込先: 郵便振替 00130-9-359857 「artissue」 ※備考欄にカンパとご明記下さい。
他行からの振込 ゆうちょ銀行 019 当座 0359857

artissue

発行・編集 artissue編集部
編集部 金原知輝 高松章子 仲本瑛乃
www.geocities.jp/azabubu/artissue
E-mail/ artissue2@gmail.com
デザイン/林慶一

2014年9月発行 第3号

前衛(的) 舞台芸術専門 FREEPAPER

[特別企画] 演出家インタビュー

INTERVIEW 1 流山児祥

INTERVIEW 2 J・A・シーザー



StageISSUE

戸谷陽子

戦後アメリカ前衛演劇の軌跡

水牛健太郎

Cui?公演から見てくる母性の欠如
—Cui? Vol.4.5「きれいなこと、なごいこと、ねごと、」

藤原央登

時事問題の取り扱い方
—燐光群「ブーツ・オン・ジ・アンダーグラウンド」

注目アーティストの視点

櫻井拓見

前衛芸術が更新するもの

カワムラアツノリ

裸の理論武装



戸谷陽子
お茶の水女子大学教授(アメリカ演劇)
戦後アメリカ前衛演劇の軌跡

アメリカ前衛演劇史に名を連ねる人々の訃報が続くようになって久しい。ラ・ママの創始者エレン・スチュワートが他界したのは2011年だが、12年にはマブ・マインズのフレッド・ニューマン、13年には同ルース・マレチェックも亡くなった。彼らの本拠地PS122は現在改築工事を行っているし、パブリックシアターはすでに12年に改修工事を終えており、イーストヴィレッジは洗練された街並みとなった。時代の推移を実感しつつ、アメリカの前衛演劇とは何だったのかに思いを馳せた。

オルタナティブ演劇、実験演劇とも言及されるアメリカの前衛演劇は、第2次大戦後のパフォーマンスという新たなジャンルの出現と以後の興隆と大きく重なる。文節言語を解体したA.アルトやG.スタインに影響されたジョン・ケイジを経由し、60年代にリヴィングシアターやパフォーマンス・グループが、理念的には歴史的アヴァンギャルドの反逆精神を受け継ぎつつ、圧倒的な身体性と、上演の「今・ここ」を主張して観客と祝祭的な経験を共有する新たな形式を模索しひとつの時代を築いた。70年代には、ロバート・ウィルソン、リチャード・フォアマン、リー・ブルーアーら「イメージの演劇」(とボニー・マランカが呼ぶ)演出家が、意識や認識、知覚の構造をさまざまな演劇的形式により実験する形で前衛演劇は展開する。エイズが深刻化する80年代後半には、身体の捉え方も著しい変化を見せ、90年代にはクリアでキャンプな身体をさらすティム・ミラーやレザ・アブドー等LGBTのアーティストが台頭する。一方で、97年には前衛演出家のジュリー・ティモアが、ディズニーとタイアップし「ライオンキング」を演出、ディズニー特有のかわいいイメージを一新し、「芸術的な」(かわくない!)仮面やパペットを新たな商品として大ヒットさせ、トニー賞ミュージカル演出部門初の女性受賞者となった。世紀が変わり、エレベーターリペアサービスやネイチャーシアターオブオクラホマは往年の反演劇を思わせるし、ビッグアートグループはウースターグループ十八番のハイテクポストモダンを進化させている。

こうしてみると、「アメリカの前衛」とは避けがたくねじれを胚胎する運命にあるようだ。60年代、管理社会に反逆し個の自由を求めた前衛の主張は、冷戦下の国家政策が演出した共産主義に対抗する自由主義のアメリカという構図を体現・回復してしまっし、高級芸術と大衆芸術の対置があいまいで、消費資本主義のもと、アヴァンギャルドとキッチュは仲良く同居する。前衛が洗練されたダウンタウンのインテリ観客や主要紙の批評家、研究者に認証を与えられるとブロードウェイ昇格の道が開けるという事実がある。莫大な製作費を要する近年のハイテク前衛演劇が、商業演劇と見分けがつかず、配給網が確立されたかのように世界各地の国際演劇祭へと撒種されてゆく構図はアメリカに限ったことでもないが、リベラリズムと市場経済に対する極めてアメリカ的な位置取りはひとつの特徴を示しているといえるだろう。

……気になる続きはartissue・Webに掲載

水牛健太郎
演劇評論家

Cui?公演から見えてくる母性の欠如

Cui? Vol.4.5『きれいごと、なきごと、ねごと、』

2014年5月31日(土)～6月4日(水)@新宿眼科画廊 スペース地下

会場の新宿眼科画廊はごく狭い平場のスペースで、椅子一つ置かれていない。そこで役者は立ったり座ったりし、時には喧嘩をしてもみ合ったりする場面もあるが、基本的に身体の演技は薄めた。劇空間を規定しているのは、圧倒的に言葉の力である。作・演出の綾門優季の書くセリフは、彼いわく「文語体」。とは言っても戦前まで使われた「～なり」といったものではなく、自らの硬質な文体を指してそう言っている。

会話の部分は基本的に話し言葉だが、同じ言葉を繰り返したり、頻繁に言葉を区切ったりするなどして、リズムを付けている。一方で、会話とは違う質感の言葉がある。独白だったり、回想だったり、全体の状況を俯瞰したりする言葉で、比較的硬い書き言葉であり、つながりの文章になっている。隠喩も多用されているので、現代詩のようでもある。ある程度劇が進行すると、このモードの言葉が挟まってくる。アクションは止まり、役者は立ったままそれを速射砲のように口にし、しばしば複数がユニゾンで声を合わせる。映像が用いられてかぶせられることもある。

PHOTO©大橋絵莉花



この作風は、11年に綾門が「Cui?」を立ち上げて以来、基本的に変わっていないようだ。なお、今回の『きれいごと、なきごと、ねごと、』は初期の作品の再演とのこと。

『きれいごと、なきごと、ねごと、』は家族劇である。だが、両親の存在感は薄い。父親は登場人物のセリフで言及されるだけで、舞台には現れない。母親に至っては全く言及されない。いないのだと思われるが、いづつどんな事情でいなくなったのかもわからない。

劇の中心となるのは三人の高校生の姉妹+彼らの大学生の兄の四人きょうだいである。だがこのきょうだいは当初から仲が悪く、劇が進行するにつれて、彼らの家庭は崩壊していく。

その理由はかなりはっきりしていて、この家族には母性がないからだ。母親がない上に、その役割を担おうとするものもない。日本社会の現実が、家庭から企業にいたるまでやや母性過多であるのに対して、全く母性が欠如した世界が描かれている。

その意味で劇の核になるのが三人姉妹の長女である。戯曲によれば名前は愛雨(あいう)。だが次女白雨(はくう)、三女翠雨(すいう)の名前が頻繁に口にされるのに、劇中で愛雨の名前は一度も登場せず、もっぱら「お姉ちゃん」と呼ばれる。年齢的には一番上の、長男の続(つづき)が「お兄ちゃん」と呼ばれることはほとんどないのに、である。

愛雨が名前ではなく「お姉ちゃん」と呼ばれるのは、妹たちが彼女に母親代わりの役割を期待しているからだ。白雨と翠雨は同じ高校の豪(ごう)を巡ってとげとげしいライバル関係にあり、愛雨が母親代わりとしてできることは大きい。二人の言い分をそれぞれに聞き、受け入れ、その上で仲裁すること。だが、愛雨はその役割を徹底的に拒否し、むしろ正論で二人を追い詰めていく。その結果として家族は当然のように崩壊していく。

この作品には母性への拒否感が横溢している。今後の綾門の作品でそれがどのように展開されていくかに注目したい。

藤原央登
劇評家

時事問題の取り扱い方

燐光群『ブーツ・オン・ジ・アンダーグラウンド』

2014年5月23日(金)～6月1日(日)@梅ヶ丘BOX

「5年越し」の上演はまさに満を持した快作だった。燐光群所属の演出助手・劇作家の清水弥生の作。現在の日本の政治問題を盛り込みながら、障害者が健常者と同じ生活を送るとはどういうことかを問うた。作品タイトルは、イラク戦争時、日本に自衛隊派遣を求めるアメリカ側の「ブーツ・オン・ザ・グラウンド」に由来している。演出は「R-vive」主宰・藤井ごう。

PHOTO©古元道広



今からおそらく数年先の日本が舞台。集団的自衛権の行使が容認され、自衛隊は米軍と共に海外で活動を行っている。そのため、自衛隊が行っていた国内の災害救助・人道支援活動は、「特別平和支援隊」が担っている。グループホームの地下にある部屋で生活する上崎翔(東谷英人)の元に、その召集令状が誤って届く。彼は事故によって四肢が麻痺し、車椅子生活を余技なくされた障害者だ。障害者でも人の役に立ち社会貢献へと繋がるような、自立した人間として生きたい。徴兵をかねてからの生き方を実現する契機と見た上崎は、周囲の反対を押し切って支援隊へ参加する。他の隊員の手助けを要しながらも、上崎はめざましい活躍を見せる。ついには海外訓練時、敵陣営の攻撃から身を守るため、銃の引き金を引くにまで至る。帰国後、専守防衛によって隊を守った人物として、上崎は英雄視される。現在、集団的自衛権の行使が閣議決定されるか否かが問題となっている。民間人が徴兵され、戦闘地域で命の危険にさらされるかもしれない。そのような近未来への警句を感じさせる。

ただ、この舞台の巧みさは政治的主張に徹していない点だ。劇の本質はあくまでも障害者の自立に根ざしている。障害者の自立の重要性を頭では了解していても、やはり健常者からすれば身体で了解することは難しい。嘘、他人事である。そこに、誰もが戦争に赴く世界という、もうひとつの「もしも」が重なることによって、虚構が正へと反転する。障害者の自立を巡る問題を、いかに観る者の肌身に迫ったものとして突きつけるか。そのことを、人の役に立ちたいという思いが自己犠牲をいとわないナショナリズムへ容易に接続すること。そして、時の権力によって恣意的に扱われる個人を描くことで表現されている。演劇ならではのアクチュアリティの喚起と言えよう。それが最も発揮されているのは、海外訓練で銃撃された支援隊の一人・榎木遼介(武山尚史)の存在である。命に別状はなかったが、榎木は右手が不自由な障害者となってしまふ。戦争状態になれば、誰もが戦地へ送られ障害者へと反転する可能性が生まれる。ここに、劇の内容が我々に無関係でないと思わせる核が宿っている。

ラスト、国家の威信を喧伝するために設けられた記者会見場へ向かうため、上崎はホームの仲間の手を借りながら自らの足で立つ。仲間の命を守るという純粋な気持ちが起こした発砲行為であり、決して英雄でないことを自分の口で説明するために。地下から地上をキッと見据える上崎の姿に、思い入れを感じたのは私だけではないだろう。

(5月29日(木)マチネ、梅ヶ丘BOX)

PHOTO©古元道広



